

いまはむかし

列車は煙霧のロンドンから逃れ出て、なだらかな丘の起伏するハンプシャーの田園を縫って走り続ける。客車の窓から木立ちの間に点在する集落を見送りながらホームズが傍らのワトソンに言う。

「人が住む所はどこだって欲望やら悪意やらがぶつかりあって事件は起きている。こうして一見平和で何事もないように見える田園だってそうだ。人の目が少ないから発覚しないままで済んでしまう事件が案外あるのじゃないか。それを考えると都会よりもこうした田舎の方がかえって恐ろしい所かもしれないね」

ひところ全集を二種類買い込んでまで反復耽読したホームズ譚も五十年前のことなので細部は殆ど忘れていたが、時にこうした本筋とは関係の無いくだりをふと思いつく。美しい自然に恵まれた、平和な田園風景の中にかえって人間への恐怖を見出すというのは、今にして思えばワケ知り顔の陳腐極まる常識論だけれど、世慣れない中学生には常識を裏切る大人の逆説として、どこか気に入るところがあったのかもしれない。

鎌倉に棲みついて三十年、さほど広くもない交際範囲の、煮詰まってきた人間関係の中に暮らしていると、いくら生来のぼんやりでも若い頃には見えなかったいろんな因縁が見えてくる。陽溜まりに仲良く垣根を連ねている旧家同士が、実は親の代から犬猿の仲であるということも、谷戸への岐かれ道で妙な具合に新設の道路が曲がっていたりするのは、それなりにわけがあることも自然に判ってくる。

病院勤務の頃からの馴染みの患者が、同じく昔からの別の患者と私の医院の狭い待合室で鉢合わせになり、積年の仇敵同士がこの時初めて主治医を同じくしていたことに気が付いて、どちらも転医してしまったのにはどちらが往生した。宅地の貸借関係がこじれて「憎会苦」の状況に陥っていた二人が三坪程しかない待合室で席を同じくしたとあっては妙薬は無い。その時のご両人の面持ちを思い浮かべると、ご両人には悪いけれど腹の底から笑いがこみ上げて来て、それを抑えるのが難しい。

しかし、こんな椿事が重なるようだと、広い待合室のある大病院ならいざしらず、零細医院は経営上はなはだイタい。創業十余年、田中医院が稼ぎまくって遂に広大な総合病院に化けられなかったのは、ひよっとしたらこの辺の対応が下手だったのかも知れぬ。

狭い土地にひしめき合って暮らしているのだから、あれこれ摩擦の起きるのは当然であろうが、昔からの同じ谷戸でつきあいの永い原住民同士ばかりでなく、小奇麗な家が幸福そうに建ち並び新興の分譲地でも、隣人との付き合い方で悩む人が多いのを見聞すると人間の業の深いことをつくづく考えさせられる。

昨年から市役所通りを走るようになったミニバスを、分譲地の中を通るように誘致しようという話が私の住む町内会で議論され始めたのは、まだ計画の段階だったからもう四年も前のことになる。この間自治会は議論を尽くして賛否の決も何度か採り、陳情を繰り返して、大多数の住民がそれを希望していることははっきりしているのに、まだミニバスは上がっては来ない。それというのも二十軒ばかりの強硬な反対派が実力行使も辞さずとしてバス会社に脅しをかけているためだという話である。噂によればバス会社は彼らに対して一人でも反対者がいたらバスは通さないという一札を書かされたとか。理不尽極まる話である。

地域の真ん中にあるこの分譲地は、住友不動産が長谷の大仏の背景になっていて海抜五十米の丘陵を、大仏側からは見えないように削って台地状に造成したものである。二百区画ほどの分譲地をもう少し標高の高い鎌倉山から遠望すると一面の緑の波濤の中に航空母艦が浮いているように見える。その環境の良さから売り出しの時は多分相当の高倍率だった筈で、私達も申し込みの抽選の日、長蛇の列に夫婦手分けして並んだ記憶がある。私の順番はたしか百十番くらいでカミさんが九十番だったか、くじ引きの順番が来た時には狙っていた所はあらかた売れていて、咄嗟に区画を決めるのに二人で惑乱させられた。昭和四十七年、狂乱物価の前年、高度成長まつさかりの頃で田中角栄が「日本列島改造論」をひっさげて首相になったのがこの年であった。

丘陵上の台地なので駅西口から市役所通りを帰ってくると、東西に二本ある分譲地への取り付け道路はどうしても長い登り坂になる。直登する元気があれば百五十段の階段を登ってもいいのだが、実行する人は少ない。住民がみんな働き盛りで、公園に子供たちの歓声が響いていた頃にはこの程度の坂など誰も問題にしなかったし、長谷トンネルがまだ開通してなくて駅西口に直通することは出来なかったから、バスを利用する人はみんな平等に県道まで降りて「火の見下」バス停を利用していった。一家に一台強の車を既にどの家でも持っていたから、誰もがこの分譲地の環境を誇らしく思いこそすれ、その反面、ここが特に交通の便が悪い地域だと考える人はなかった。県道藤沢鎌倉線から八雲神社交差点で分岐した盲腸の様な道路が近い将来全通して市役所通りと命名され、駅西口に直通するバスが走るようになるなどという話は当時は誰も知らなかった。

しかし、気が付けば今や超高齢者時代、どこのお宅も老人ばかりという状態になって状況は一変していた。駅に近いといっても歩けば二十五分以上はかかるし、特に復路は登り坂になって老人には辛い道である。駅から梶原方面へのバスが市役所通りを走るようになるのなら是非分譲地が上がって貰おうと希望する人が自治会員の八割を超えたのも当然の成り行きで、自治会にバス問題検討委員会が発足した頃、停留所の位置、便数など調整を要することはいろいろあるにせよ、バス誘致に基本的には何も問題ないと、私ばかりでなく殆どの自治会員は考えていたと思う。ところがことは簡単ではなかった。

検討が始まった頃、高齢者のアシ確保と地域の環境保全の二つの問題の兼ね合いの点で

意見が異なり、環境保全優先でバス乗り入れに慎重な人たちが一割、二十軒ほどあることが明らかになった。認識の程度で意見の違いがあるのは当然で、この人たちとも分譲地が高齢者には必ずしも住み良いとは云えなくなって来ているという共通の認識が得られればバスの便数などの調整で、意見の違いは克服出来る筈であった。ところがこの一割には絶対反対、問答無用で一本たりともバスは通さないという輩が数人混じっていて、今までの善き隣人の仮面をかなぐり捨てた彼らの特異な言動によって、自治会は大揺れする事になった。

自分勝手なエゴイストであることを恥ともせず、話合えばすぐにキレて過剰に攻撃的になる奇人がここにも棲息していたのである。小さな自治会であっても二百世帯あれば未熟な連中が若干数いるのはむしろ当然で、バス問題を契機に潜在バカが一気に表面化したということではあるのだが、その言動から彼らが単に人として未熟とか知恵遅れの幼児タイプということではなくて、隣人に対して明らかに悪意を持ち、それを隠そうともしない連中だということが次第に判ってきた。これは自治会が今まで経験したことの無い新しい事態であった。

彼らは自分達が少数意見であることを承知していて、初め自治会や検討委員会がバス誘致賛成に偏向していて中立でないと騒ぎたて、理事や委員に対して執拗な個人攻撃を繰り返した。それは論争などという明るいものではなく、吊るし上げ、脅迫に類する陰湿なものであった。彼らはまた自治会の活動を偏向呼びわりで牽制する一方、バス会社、陸運局、鎌倉市などへ精力的に陳情攻勢をかけた。僅か数人であっても居住者が自分たちの環境保全優先を唱えれば、外部の誰も異論を差し挟み得ないことをテコにして、百八十世帯の高齢者の希望を粉碎して廻った。そればかりか自治会臨時総会での全員投票では反対意見が少数に留まると知った彼等は総会を欠席し、自治会を脱退したと称して二十世帯で別の* *町内会」なるものを作った。住民代表を僭称し、バス会社を恫喝するのが最も有効な反対方法であることを知っている彼等は、実体は無くとも「町内会」の名前だけは是非必要としたのである。

私はこの虚構の一割町内会の発想に、かつて労働運動が盛んだった頃、強い労働組合に手を焼いた会社側が陰で画策して、意のままになる第二組合を作らせて分裂を図った組合潰しの手口を連想した。まさにあれの裏返しではないか。バス導入を分譲地の環境保全と高齢化した住民のアシの問題とのバランスで考えようという健全な自治会が、幅広い賛成を得て一本に纏まっていては彼らは困るわけで、自治会が分裂しているという印象を内外に与えてその影響力を一方で殺ぎ、一方で自分たちの存在を認めさせる。住民とのトラブルを恐れるバス業者は路線申請に二の足を踏む、結果としてバスは上がって来ない。万歳、勝った勝った。。。しかし、こうして八割の多数意見は足蹴にされ、誰もが等しく一票の権利を持つという住民自治の理念は否定されたのである。

誰もが平等であるべき町内会の意味決定には多数決以外の方法はない。彼等は脱退する

ことで多数決の理念を否定しておきながら、「町内会」を自称する自分たちの組織の内側ではその理念に継らざるを得ない。これは大きな矛盾だが、もとよりその矛盾に苦しむような知性を彼等は持ち合わせてはいない。

「**町内会」の初代会長はテレビタレントである。彼の車庫には外車が2台ある。これを乗り回しながらバスが分譲地に乗り入れると空気が汚れ環境が悪くなると嘯き、人気者の俺の家の前を通ればストーカーがやって来て家の中が覗かれるから絶対反対だと真顔で言う。足弱の老婦人たちが連れ立って実情を訴えに彼を訪ね、せめて一日数本でいいからミニバス乗り入れを認めて欲しいと頼んだところ、返事に窮したのか、彼はその懇願に何の返答もせず、あろうことかその日のうちに仲間と、陸運局に絶対反対を申し入れに出かけたという話である。エゴを丸出しにするにはなっても、彼はなぜ自分がバス反対であるかを自分の言葉で老人たちに語りかけるべきであった、それが隣人に人間としての誠意を示すことだと私は思うが、覚えてない台詞は吐くこともできないわけか。

バスを切望していたお年寄りや私の商売柄関係していた病弱な方が大きな失望のうちに昨年一年間だけで四人亡くなられた。この人達は勿論、残った多くの人達のこの連中に対する恨みは大きい。意見の違いを論議を交わして克服しようとする、隣人としての善意も力量も無いくせに、トラブルを嫌うバス会社に圧力をかける手管には長じている連中のせいで、ミニバスはまだ分譲地が上がって来てない。それまではコソ泥が稀に出没するくらいで平穩無事であった「丘の上の高級分譲地」が、ご多分に漏れず、実は手前勝手な連中の跳梁する憂世の泥舟であったことが明らかにになって索然たる想いがある。

「怨憎会苦」はこの様にして誰かの独善と悪意から始まるという因果をありありと見せられた四年であった。